

# フィギュアスケートと舞踊芸術の文化交渉史 ——ジョン・カーリーによる1970-80年代のコラボレーションの意義

町田 樹 (國學院大學)

## Abstract

British figure skater John Curry (1949-1994) was a driving force behind the fusion of figure skating and ballet in the 1970s and 1980s. He won the men's figure skating gold medal in the 1972 Winter Olympics in Innsbruck. In addition to ice skating, he was engaged in ballet since his youth, and appeared on stage as a dancer. Curry collaborated with many dance choreographers, leveraging his strengths as a dual-medium performer who advanced both the disciplines of figure skating and ballet. The purpose of this paper is to systematically organize the collaborative achievements as they are still ambiguous and describe them as a history of cultural interaction between figure skating and dance.

Extensive archival research revealed that Curry collaborated with 15 choreographers on 24 figure skating performances between 1976 and 1984. These works were divided into the following groups according to their contents: (1) works created based on the style of classical ballet, (2) works that reflect the artistry of the choreographers, (3) adaptations of existing dance works, and (4) comparative experimental works that contain the same movements on the floor and on the ice. In addition, examining the creative processes and intentions of Curry and the choreographers in detail reveals that their collaborations aimed to expand the forms of classical ballet and postmodern dance, in addition to figure skating. Consequently, their collaborations can be evaluated as epoch-making efforts that connect the history of figure skating with the history of dance.

目次:

1. 序論
2. ジョン・カーリーというキーパーソン  
——その「ジェンダー」と「ディシプリン」
3. カーリーと舞踊振付家のコラボレーション  
——活動と作品の体系的整理
  - 3-1. コラボレーションの概要
  - 3-2. コラボレーション作品の傾向
4. コラボレーションの戦略
  - 4-1. カーリーの大志——フィギュアスケートの昇華
  - 4-2. 舞踊振付家たちの期待——舞踊振付の拡張
5. 結語——フィギュアスケート史と舞踊史の紐帯

## 1. 序論

「氷上のヌレエフ」<sup>[1]</sup>, あるいは「スケート界のアンソニー・ダウエル」<sup>[2]</sup>——これらは、かつて1970-80年代に活躍したジョン・カーリー (John Curry, 1949-1994) というイギリスのフィギュアスケーターに与えられた異称である。ヌレエフとダウエルはいずれも、言わずと知れた20世紀を代表する舞踊家であり、クラシックバレエの分野において画期的な活動を次々に展開した。

そうした別称からも示唆される通り、ジョン・

カーリーという人物は、フィギュアスケート（以降、「FS」と略記）とバレエのフュージョンを推進したアーティスト志向のスケーターである。後に改めて説明することになるが、1970年代当時、男性のFS競技を席卷していたのは、踊りの素養や優雅な身のこなしなどではなく、力強くアスレチックな滑りと高難度ジャンプが重視される「男らしい」スケーティングスタイルであった。こうした状況の中、カーリーは当時の男性スケーターとしては極めて珍しく、高難度ジャンプを会得しながらも、「バレエのディシプリン」<sup>[3]</sup>に裏付けられたアーティスト的なスケーティングスタイルを追求し、次々とFSの新境地を切り開いていくこととなる<sup>[4]</sup>。

かくして競技者としてのカーリーは、その類稀な才能によりおよそ順風満帆なキャリアを歩んだ。1971年、自身初となる全英チャンピオンの座を獲得した後、そこから着実に競技力と世界ランクを向上させていき、1976年2月にはついにインスブルック冬季オリンピックで優勝を果たす。さらに同年、五輪の他にも欧州選手権大会や世界選手権大会などの主要国際競技会を全て制覇するという偉業を成し遂げ、カーリーはイギリス国内外において一躍時代の寵児となった。

ところが、ジョン・カーリーというスケーターの本領は、むしろ競技引退後に発揮されることになる。カーリーはオリンピックや世界選手権で優勝を飾った直後の1976年3月に競技を引退し、アイスショーなどの舞台上で演技を披露するプロフェッショナルスケーターへと転身した。そして、自らが主宰するスケーティングカンパニーを旗揚げし、ブロードウェイをはじめとする欧米各地の劇場で公演を行いながら、自身の理想とする舞踊芸術としてのFSを追い求め続けた。競技者としても名を馳せたカーリーであったが、プロスケーターとしての活動もたちどころに*The New York Times*の芸術面や*Dance Magazine*などで頻繁に取り上げられるようになり、「スポーツとしてのFSをアートへと昇華させた先駆者」<sup>[5]</sup>として高く評価されるまでに至ったのである。

実は当時、そうしたカーリーの志と活動に多くの「舞踊振付家」<sup>[6]</sup>が共鳴し、フィギュアスケーターとダンサーが協働して作品を創作する「コラボレーション」が数多く試みられるようになった。カーリーとの協働がとりわけ注目された舞踊振付家は、ポストモダンダンスの旗手の一人であるトワイラ・サープ (Twyla Tharp, 1941-) である。1976年11月、彼らはスケーティング動作にダンスの表現方法を大胆に取り入れた《アフター・オール After All》というFS作品を発表した。この斬新なコラボレーションは、FS界および舞踊界の両者において大きな話題を呼ぶこととなった<sup>[7]</sup>。

そして、この出来事を皮切りに、カーリーは様々な舞踊振付家と協働してFS作品を創作していくようになる。例えばサープの他にも、ケネス・マクミラン (Kenneth MacMillan, 1929-1992)、ロバート・コーハン (Robert Cohan, 1925-2021)、ピーター・ダレル (Peter Darrell, 1929-1987)、ノーマン・マアン (Norman Maen, 1932-2008)、エリオット・フェルド (Eliot Feld, 1942-)、ラー・ルボヴィッチ (Lar Lubovitch, 1943-)、ローラ・ディーン (Laura Dean, 1945-)、ピーター・マーティンス (Peter Martins, 1946-) など、錚々たる舞踊振付家の名を並べることができる。

なおFSの歴史において、スケーターと舞踊振付家の協働は数こそ多くはないものの、1930年代より行われてきたことが確認できる<sup>[8]</sup>。ただし、カーリーが登場する以前のコラボレーションは、舞踊振付家が演出および振付した作品をスケーターが単に実演する、という一方的な関係の上に成り立っているような協働であったり、あるいは、舞踊振付家とスケーターがある程度対等に協働していたとしても、完成した作品が見世物のような内容であったりしたようである<sup>[9]</sup>。そうした歴史的背景を踏まえると、カーリーが牽引した1970-80年代のコラボレーションというのは、創作した作品

の量や参画した振付家の人数といった点において、史上最も大規模で活気を帯びたものであったと位置付けることができるだろう。また、カーリーと舞踊振付家たちの協働は、従来スポーツや見世物としてしか認識されていなかったFSを、舞踊芸術の域へと発展させた画期的な試みであったとも評価できるのである。

しかしながら、カーリーを中心としてこれほどまでに数多くのコラボレーションが実施されてきたのにもかかわらず、彼らの協働については断片的な記録が点在するのみで、未だにその実態がよくわかっていない。協働に関する資料が集約されているわけでもなければ、協働作品の全てが映像で記録されているわけでもないため、カーリーと舞踊振付家らのコラボレーションはFS史と舞踊史の両歴史から完全に欠落してしまっているのである<sup>[10]</sup>。

そこで本論文では、カーリーと舞踊振付家の協働に関する既存資料の悉皆収集と、未発見資料の発掘を初めて試み、それら資料を網羅的に整理および分析する。それによって今後、彼らの活動や作品を研究する上で前提となり得る基礎研究としての歴史記述を、展開していきたい。そして、カーリーと舞踊振付家はいったい何を目的に活動したのか、その意味を解き明かし舞踊史に組み入れる。本論によって、FS史と舞踊史の紐帯となるコラボレーションの意義が初めて明らかになるはずである。

## 2. ジョン・カーリーというキーパーソン ——その「ジェンダー」と「ディシプリン」

まずは、コラボレーションの実態を探る上で重要となるカーリーの伝記的事実について、簡潔に確認していくことにしよう。幸いにも、当時カーリーは時の人であっただけに、その人生をめぐっては複数の伝記やドキュメンタリーが編纂されている。代表的な伝記としては、キース・マナーとカーリー自身によって編まれた自伝*John Curry* (Knopf, 1978) と、エルバ・オグランビーによる*Black Ice: The Life and Death of John Curry* (Victor Gollancz, 1995)、そしてビル・ジョーンズにより記された*Alone: The Triumph and Tragedy of John Curry* (Bloomsbury Sport, 2014) の3冊が挙げられるだろう。

本論では、以上に示した伝記を参照しながら、舞踊振付家との協働に深く関わるとされる彼の「ジェンダー」と、アーティストとしての「ディシプリン」について簡潔に整理していきたい。

実は、カーリーはスケーターとして常にジェンダーバイアスに晒されていた人物である。伝記を通じて語られたカーリー自身の証言と、FSのジェンダーにまつわる先行研究によると、1980年代頃

までスケート界では男性がスパイラル<sup>[11]</sup>などの技を実施したり、上半身をしなやかに動かしながら優雅に滑ることは忌避されていたという<sup>[12]</sup>。当時、一般的にFSや新体操をはじめとするアーティスティックスポーツは、「女性に適した」あるいは「女性らしい」スポーツであると見做されていた。そのため、男性がアーティスティックスポーツに参画しようものなら、女々しいと揶揄されたり、同性愛者であることを疑われたりするなど、女性優位のジェンダーバイアスが強烈に働いている時代であったようである<sup>[13]</sup>。だが、カーリーはそうした風潮にも負けず、自身の理想であるバレエダンサーが舞っているようなスケートティングを追求し続けた。当時師事していたコーチたちが「男らしい」スケートに矯正しようと何度も試みたらしいが、カーリーは頑なに妥協しなかったようである<sup>[14]</sup>。なお、カーリーは自身の性的指向がゲイだということを認識しており、なおかつ、そのことを敢えて隠さずに活動していたこともあって、上記以外のジェンダーバイアスとも闘わねばならぬ人生であった。

では、なぜカーリーはジェンダーバイアスに抗してまで舞踏的なスケートティングを追求したのか。それは彼が「FSのディシプリン」<sup>[15]</sup>はもちろんのこと、バレエのディシプリンも会得していたからに他ならない。カーリーは幼少期からバレエに対して強い憧れを抱いており、ダンサーになることを夢見ていた時期がある。結果的には父親の反対によりその夢を諦めざるを得なかったのだが、カーリーはスケーターとしての活動の傍らで、18歳の頃からバレエの研鑽にも本格的に取り組むようになった<sup>[16]</sup>。彼は、ランバート・ダンス・カンパニー（現ランバート）の元団員であるジョイス・グレーム（Joyce Graeme, 1918-1991）の手ほどきを受けた後、NYにあるアルヴィン・エイリー・ダンススクールにも通い、主にロバート・クリストファー（Robert Christopher）によるクラシックバレエのクラスと、マーサ・グレーム（Martha Graham, 1894-1991）によるモダンダンスのクラスを受講しながら、ダンサーとしても活動すべく努力を重ねた<sup>[17]</sup>。その結果、カーリーはダンサー兼俳優として舞踏家アグネス・デ＝ミル（Agnes de Mille, 1905-1993）が監督を務める《ブリガドーン Brigadoon》（1980-81年）をはじめ、複数の舞台への出演を果たしたのであった<sup>[18]</sup>。

カーリーのスケートティングを見ればすぐにでも一目瞭然となるのだが、彼は氷上でバレエのパをそのまま行うことはしない。しかし、一つひとつのスケートティング動作は、バレエのディシプリンに忠実に従うものとなっているのである。例えば、氷から離れているフリーレッグが必ずアン・ドゥオール状態で維持されていたり、上半身の姿勢

は常にエポールマンが意識されているため、身体のラインが寸分の間なく、いつ何時でも整っている。また、腕の動きもポール・ド・ブラの作法に則っており、動作と動作が途切れることなく滑らかに展開される。1970-80年代当時、これほどの確にバレエの定型的ポジションとスケートティング動作を融合させることができたスケーターは、やはりカーリーを置いて他に存在しなかっただろう。

かくしてジョン・カーリーという人物は、FSとバレエのディシプリンを一通り修めただけでなく、それらのフュージョンをジェンダーバイアスにも臆することなく試行錯誤し続けた孤高の人物だと、ここで改めて評価し得るのである。

### 3. カーリーと舞踏振付家のコラボレーション ——活動と作品の体系的整理

これまでコラボレーションの主導者となるカーリーの人物像について、ジェンダーとディシプリンを中心に確認してきた。では、誰よりも優れたスケートティング技術を会得しており、なおかつ、誰よりもそれをバレエのディシプリンに当て嵌めて行うことができる踊り手であったカーリーは、一体いかなる人物たちと協働し、どのような作品を創作したのだろうか。次に、カーリーと舞踏振付家たちが1970-80年代にかけて試みたコラボレーションの実態を解明していくこととする。

#### 3-1. コラボレーションの概要

何よりもまず、従来曖昧なままとされてきたコラボレーションの全体像を把握していくことにしたい。

表1は、カーリーと舞踏振付家が協働創作したFS作品の一覧である。実は、FS界唯一のアーカイブ機関である世界フィギュアスケート博物館（米国コロラド州）には、アーキビストにより作成されたカーリーの公演歴や創作歴に関する資料（非公開）が保存されている。これらはカーリー研究を進める上で非常に参考となる重要資料ではあるのだが、筆者が2017年に現地調査を行ったところ、その内容は決して完全というわけではなく、情報に欠落や誤りが数多く散見された。そこで本論では、先に挙げた伝記はもとより、筆者が独自に収集したカーリー関連の公演パンフレット類や、*The New York Times*をはじめとする英語および仏語圏の各種雑誌において掲載された同時代批評、さらには作品が収録された映像などの新出資料を手がかりに、コラボレーション作品の詳細について可能な限り正確に整理し直した。従って表1にまとめられた作品情報は、こうして同博物館収蔵資料の欠陥を精緻に補完したものである。

カーリーは五輪で優勝しプロに転向した1976年か

表1. ジョン・カーと舞踊振付家のコラボレーション作品一覧

No.	初演年	作品タイトル	振付家	舞臺家	使用楽曲	衣装デザイン	映像記録	作品類型	典拠文献
1	1976	<i>Solo pour Deux</i>	Peter Heubi	Peter Heubi / John Curry	—	—	○	第4類型	①
2	1976	<i>I Got It Bad, and That ain't Good</i>	Norman Maen	John Curry	"I Got It Bad, and That ain't Good" by Duke Ellington	—	○	—	②
3	1976	<i>Afternoon of a Faun</i>	Norman Maen	John Curry & Peggy Fleming (or C. Foulkes)	"Prelude to the Afternoon of a Faun" by Claude Debussy	Nadine Baylis	○	第1・3類型	④
4	1976	<i>After All</i>	Twylla Tharp	John Curry	"Trumpet Concerto in E-flat Major" by Tomaso Albinoni	Santo Loquasto	○	第2類型	⑥
5	1976	<i>Jazz Suite</i>	Norman Maen	John Curry, Lorna Brown & 5 others	Thad Jones and Mel Lewis's music arranged by Dave Lindup	Joe Eula	×	—	③
6	1976	<i>Fear Falls</i>	Kenneth Maes/Milan	John Curry	"Transcendental Etude No.5" by Franz Liszt	Joe Eula & Harry Lines	×	—	③
7	1976	<i>Scenes of Childhood</i>	Peter Darrell	John Curry, Lorna Brown & 5 others	"Kinderscenen Op.15" by Robert Schumann	Joe Eula	×	—	③
8	1976	<i>Suite for Star</i>	Peter Darrell & John Curry	Lorna Brown, Catherine Foulkes & 4 others	Grant Hossack	Anthony Dowell	×	—	③
9	1976	<i>Le Vaise Glace</i>	Ronald Hynd	John Curry, Jacqui Harbord & 10 others	Drigo	Nadine Baylis	×	—	④
10	1977	<i>Icarus</i>	John Butler	John Curry & Ron Alexander	Gordon Crosse	Nadine Baylis	×	—	④
11	1977	<i>Winter 1895</i>	Ronald Hynd	All of John Curry Skating Company	Arthur Seymour Sullivan	Nadine Baylis	×	—	④
12	1978	<i>Tango-Tango</i>	Peter Martins	J. Curry & Jolo Starbuck	"Tango" by Igor Stravinsky & "Jalousie" by Jakob Gade	D.D. Ryan	○	第1類型	⑤
13	1978	<i>Palais de Glace</i>	Donald Suddler	J. Curry, Lorna Brown, Catherine Foulkes	"Le Patineurs" by Giacomo Meyerbeer	Florence Klotz	○	第1類型	⑤
14	1978	<i>Scoop</i>	Douglas Norwick	Paul Toomst, Deborah Page & 2 others	Donald Ashwander	Sara Brook	○	第3類型	⑤
15	1978	<i>Tilt-A-Whirl</i>	Lar Lubovitch	John Curry & Peggy Fleming	"Lady Day" & "North Star" by Philip Glass	Anne C. de Velder	○	第2類型	⑧
16	1978	<i>Ice Moves</i>	Jean-Pierre Bonnefoux	John Curry, Catherine Foulkes & Ensemble	"Roman Carnival Overture" by Hector Berlioz	Joe Eula	○	第1類型	⑤
17	1978	<i>Myth</i>	Robert Cohan	John Curry & 6 others	"Masque of Separation" by Burt Alcantara	Norberto Chiesa	×	第3・4類型	⑤
18	1980	<i>Three Fanfares</i>	Twylla Tharp	John Curry	"Festmusik der Stadt Wien" by Richard Strauss and 3 other musics	—	○	第2類型	⑥
19	1982	<i>The Snow Queen</i>	J. Curry & Jean-Pierre Bonnefoux	John Curry & 5 others / A large ensemble	"The Seasons" & "Raymonda" by Alexander Glazunov	—	○	第1類型	⑦
20	1984	<i>Court of Ice</i>	Lar Lubovitch	John Curry, JoJo Starbuck & 7 others	Johan Sebastian Bach	Anne C. de Velder	×	—	⑧
21	1984	<i>La Valse</i>	Jean-Pierre Bonnefoux	Nathan Birch, Lori Nichol & 9 others	"La Valse" by Maurice Ravel	Anne C. de Velder	×	第3類型	⑧
22	1984	<i>Meditation</i>	Jean-Pierre Bonnefoux	Catherine Foulkes & Mark Hommike	"Meditation" from <i>Thais</i> by Jules Massenet	Anne C. de Velder	○	第1類型	⑧
23	1984	<i>Burn</i>	Laura Dean	John Curry & John Curry Skating Company	"Equinoxe Pt.6 & 7" by Jean Michel Jarre	Anne C. de Velder	○	第2類型	⑧
24	1984	<i>Moon Skate</i>	Eliot Feld	John Curry	"Piano Concerto in G major" by Maurice Ravel	Willa Kim	○	第2類型	⑧

【注】表1を作成するにあたり参照した文献は以下の通りである。

- ① "Face au sport," *Le Nouvelliste*, 17 janvier, 1976, p.6./ "G.Z. "Face au Sport," *Le Nouvelliste*, 19 janvier, 1976, p.12.
- ② John Curry & Keith Money, *John Curry*, Michael Joseph: London, 1978, p.68.
- ③ *John Curry Theatre of Skating: Cambridge Theatre* (Souvenir Program), Stihwell Darby & Co. Ltd.: London, 1976, pp.16-17.
- ④ *John Curry Theatre of Skating II: London Palladium* (Souvenir Program), Stihwell Darby & Co. Ltd.: London, 1977, pp.15-16.
- ⑤ *John Curry's "IceDancing"* (Souvenir Program), George Fenmore Associates, Inc.: New York, 1979, pp.9-10.
- ⑥ Bill Jones, *Alone: The Triumph and Tragedy of John Curry*, Bloomsbury Sport: London, 2014, pp.220-221.
- ⑦ Joseph Durso, "Ballet on Skates," *The New York Times*, November 30, 1982, Section D, p.28.
- ⑧ *The John Curry Skating Company* (Souvenir Program), George Fenmore Associates, Inc.: New York, 1984, pp.13-14.

ら1984年にかけて、総勢15名の舞踊振付家と協働し、計24作ものFS作品を発表している。そうした作品はいくつか例外はあるものの、基本的にはカーリー自らが主宰するスケーティングカンパニーの公演で披露されたものである。カーリーは、そのキャリアの中で、Theatre of Skating (1976-77年)<sup>[19]</sup>、Ice Dancing (1979年)<sup>[20]</sup>、A Symphony on Ice (1984年)<sup>[21]</sup> という3つのカンパニーを組織している。これらのカンパニーの活動期間はいずれも1年から2年と短いのだが、カーリーが単独で振り付けた作品と、表1に示したコラボレーション作品の両者を織り交ぜたプログラムを引っ提げて、欧米を中心に世界各地を巡業した<sup>[22]</sup>。

いずれのカンパニーも、カーリーによる選りすぐりのスケーターたちで構成されており、その多くがやはりバレエ経験者となっている<sup>[23]</sup>。ちなみに、カーリーの活動を集めるTV番組を通じて開示されたカンパニーの稽古を見てみると、主としてフロアでのバレエレッスンと、バレエのディシプリンに則してスケーティングのエクササイズを行う氷上レッスンの2つから成り立っており、カーリーが舞踊界のカンパニーさながら極めてアカデミックかつ厳密に構造化された独自のルーティンワークに基づいて団員であるスケーターたちを教育していたことが窺える<sup>[24]</sup>。コラボレーションに携わった舞踊振付家たちは、こうしてカーリーの舞踊的なスケーティングスタイルに精通する団員たちで組織されたカンパニーの活動に、参画していたことになるのである。

では次に、カーリーと舞踊振付家たちが実際どのように協働し、作品を形づくっていったのか、コラボレーション作品の創作方法について明らかにしていきたい。

言うまでもなく、カーリーはFSとバレエの両ディシプリンを熟知していただけでなく、それらを自在に操ることができた。その一方で舞踊振付家の側には、バレエのディシプリンが完璧に備わっていたとしても、FSに関する知識が一切なかった。そのためカーリーは協働する前に、必ず舞踊振付家をスケートリンクに連れて行き、実演を交えながらFSのディシプリンを説明したという。しかし、舞踊振付家が一朝一夕にそれらを理解できるはずがない。結局、カーリーと舞踊振付家たちはFSに関する共通認識を形成できぬままコラボレーションに臨む他なかったようだ<sup>[25]</sup>。

そしてそうとなれば、舞踊振付家の領分であるバレエとスケーターの領分であるスケーティング技術の両方に精通しているカーリーが、協働創作の際にどのような役割を担っていたかが、必然的に見えてくるというものだろう。カーリーはコラボレーションにおける自身の立ち位置について、次のようにインタビューで語っている。

私は彼ら（舞踊振付家たち）に、自分たちが使用している音楽に対し舞踊用語（動作）で行いたいことを尋ね、そして、私たちはそれをフィギュアスケート用語（動作）へと翻訳する。<sup>[26]</sup>

このようにカーリーは終始一貫して、舞踊振付家が導き出したアイデアやフロアでの動きを氷上のスケーティング動作へと変換する、いわば「翻訳者」としての立場で創作に関与していた。ただし、この翻訳者としてのカーリーは、あくまでも裏方に徹しており、作品創作に対する自らの貢献を表立って主張することはなかった。その証拠に表1が示す通り、作品No.8とNo.19という例外はあるものの、公演パンフレットなどの公式刊行物においては、コラボレーション作品の創作を担当した振付家の名を明示するクレジット欄を確認しても、カーリーの名は記載されていない。だが以上に引用したカーリーの証言を踏まえると、内実はそうしたクレジット表記のない作品であったとしても、彼のアイデアや作意が多分に反映されていると推測できるのである。なお、カーリーの氏名がクレジットとして表示されている表1の作品No.8《シタルのための組曲 Suite for Sitar》(1976年)と、No.19《雪の女王 The Snow Queen》(1982年)に限っては、カーリーも主体的に作品のアイデアや振りを考案し、舞踊振付家と対等な立場で協働創作したと考えられる。

### 3-2. コラボレーション作品の傾向

それでは続いて、以上に示した協働過程を経て創作された作品の内容を分析していきたい。ただし、本論はあくまでもカーリーと舞踊振付家によるコラボレーションのあり方を記述することに主眼を置くものであるため、表1に掲載された作品一つひとつを詳細に取り上げることはしない。その代わりに、ここでは表1の作品群全体に共通する特徴や傾向を簡潔に論じることとする。

なお残念ながら、表1の作品をめぐっては公式のアーカイブ映像がほとんど存在しない。唯一、公式アーカイブが確認できるのは、カーリーにとって自身2度目となるカンパニー Ice Dancing にて上演された作品群（すなわち、表1のNo.3-4とNo.12-16）のみで、これらはワーナーホームビデオが1980年に発売したVHS製品 *John Curry's IceDancing* (Catalogue No.30003) に収録されている。それ以外の作品についても、当時テレビで放送されるなど、何らかに映像化されている場合が多いのだが、約半世紀が経過した今となっては、放送事業者のアーカイブに眠っていると思われる収録映像を発掘するか、もしくは、動画投稿サイトなどを通じて、当時のテレビ録画を所有する個

人からネット上に映像が提供されていないか探し続けるより他ない状態となっている。とはいえ動画投稿サイトでは、最新の伝記やドキュメンタリー映画が制作されてカーリーが再評価されるようになったことを受け、表1の作品映像が（非公式ではあるものの）続々と公開されてきていることも事実である。

今回そうしたアーカイブ映像をあらゆる手段を駆使してくまなく探し、可能な限り多くのコラボレーション作品を実見した。すると、協働作品はその内容の傾向に応じて、およそ4つに分類できることが明らかとなった。その4つの作品傾向とは、すなわち以下の通りである。なお、表1の各作品の分類については、「作品類型」欄を参照されたい。

### 〔第1類型〕 バレエのディシプリンに基づいて創作された作品群

この第1類型には、主としてマーティンスやドナルド・サドラー（Donald Saddler, 1918-2014）、ジャン＝ピエール・ボンフー（Jean-Pierre Bonnefoux, 1943-）の作品が当て嵌まる。これらの作品は、徹底してバレエのディシプリンに則して振り付けられていることが最大の特徴と言えるだろう。基本的に作品全体を通じて、腕の動きはアン・バー、アン・ナヴァン、アン・オー、ア・ラ・スゴンドの各ポジションを丁寧に通していくようなポール・ド・ブラとなっており、なおかつ身体のラインも常にエポールマンやアン・ドゥオールが意識されている。こうしてバレエの定型的ポジションを適用したスケーティング動作によって、作品が構成されているのである。

また、「スケーティングバレエ」とも称された表1のNo.8《雪の女王》<sup>[27]</sup>や、振付を担当したサドラー自身が「アイスバレエ」と呼んでいたNo.13《氷の宮殿 Palais de Glace》（1978年）<sup>[28]</sup>などに顕著にみられる特徴であるが、作品の構造も、パ・ド・ドゥやソロパリエーション、コール・ド・バレエ、コーダなどのグランドバレエやディベルティスマンの上演形式が多々応用されている。そして、とりわけ第1類型の作品群で注目すべきは、技のフュージョンが模索されているということだ。例えば、FS特有の回転技であるツイズル<sup>[29]</sup>をグラン・フェット・ロン・ドゥ・ジャンプ・アントゥールナン（フェットターン）のように変形させたり、バレエのマネージュの形式を応用してアクセルジャンプやループジャンプを連続で繰り出しながら円状の軌跡を描くなど、スケーティング動作とパの融合も時折試みられている。無論、バレエのディシプリンに精通しているカーリーは、それらを十全に踊りこなしている。カーリーにとってこの第1類型は、最も本領を発揮することができる

た作品群であっただろう。

### 〔第2類型〕 舞踊振付家の作風が色濃く反映されている作品群

第1類型の作品群は徹底的なまでにバレエのディシプリンに則って振り付けられているため、舞踊振付家の個性はほとんど感じられない。一方でそれとは対照的に、サーブやディーン、ルボヴィッチ、フェルドといったモダンダンスやポストモダンダンスの旗手たちによって創作された第2類型の各作品には、それぞれ舞踊振付家の作風が色濃く反映されているという特徴がある。

例えば、サーブは《デュース・クーペ Deuce Coupe》（1973年）を筆頭に、異なるジャンルの舞踊様式を並置させる独自の創作技法を用いて振付を行うことがあるが、そうした作風がカーリーとの協働作品である《アフター・オール》にも顕著に表われている<sup>[30]</sup>。またディーンの《バーン Burn》（1984年）も、彼女の作品を象徴する2大特性——すなわち、幾何学のフォーメーションと回転動作によって構成されている<sup>[31]</sup>。このように第2類型の作品群は、バレエの舞踊様式よりも、舞踊振付家ならではの創作技法をいかに氷上において応用するかということに重点が置かれているのである。

### 〔第3類型〕 既存の舞踊作品を翻案した作品群

コラボレーション作品の多くは、舞踊振付家独自の着想によって創作されているのだが、中には既存の舞踊作品を翻案したアダプテーション作品も見られる。なお当時のFS界において、舞踊作品を翻案する試みは非常に画期的であった。

この第3類型の代表例としては、やはりマアンの《牧神の午後 Afternoon of a Faun》（1976年）が挙げられる。言わずと知れた、ヴァーツラフ・ニジンスキー（Vaslav Fomich Nijinsky, 1890-1950）の同名作品（1912年）を、FSのディシプリンを用いて翻案している。カーリーとペギー・フレミング（もしくはキャサリン・フォルクス）の2名で牧神とニンフの戯れを表現しているのだが、ニジンスキー作品の革新性であるモダンイズム、ヘレニズム、プリミティヴィズムなどが踏襲されているわけではなく、終始バレエのディシプリンに基づいた美しい動きで構成されている<sup>[32]</sup>。本作はカーリーの代表作として認識され、後進のフィギュアスケーターたちにも多大なる影響をもたらしているが、ニジンスキー作品の革新性を引き継ぐものではないという点において、アダプテーション作品としては凡庸と評価せざるを得ないだろう。

またダグラス・ノーウィック（Douglas Norwick）の《スクープ Scoop》（1978年）は、NYを拠点とする子ども向け劇団The Paper Bag Playersが上

演していた同名作品のアダプテーションである。その他にも、残念ながら映像は残っていないのだが同時代批評によって、ボンフーの《ラ・ヴァルス La Valse》(1984年)がジョージ・バランシン(George Balanchine, 1904-1983)の同名作品(1951年)を、コーハンの《神話 Myth》(1978年)が本人振付のモダンダンス作品《マスク・オブ・セパレーション Masque of Separation》(1975年)を翻案した作品であることが、それぞれ指摘されている<sup>[33]</sup>。

#### [第4類型] フロアと氷上の両フィールドで同一の表現を試みる比較実験作品群

第1から第3類型にかけてのコラボレーションは、カーリーと舞踊振付家が協働して1つのFS作品を創作するものであった。一方でこの第4類型は、スケーターとダンサーがそれぞれ氷上とフロアで全く同じ作品を上演し、両者の表現や動作を比較するという点で、他のコラボレーションとは趣が大きく異なる。

代表例としては、スイスの舞踊振付家であるピーター・ヒュービ(Peter Heubi)との協働作品《ソロ・プール・ドゥ Solo pour Deux》(1976年)が挙げられる。この作品はスイスのTVで放送する映像作品として提示されたものとなっている<sup>[34]</sup>。フランス語で「2人のためのソロ」と名付けられている通り、同じ動作を実施する氷上のカーリーとフロアのヒュービをそれぞれ映像に収め、それら2つの映像を対比させたり、交互に切り替えながら作品全体を映し出すという趣向で制作された。当然、彼らは同じ動作を行っているのだが、2人の映像を比較すると、やはり氷上とフロアでは動きの性質が異なることが浮き彫りになる。

かくして第4類型のコラボレーション作品は、実験精神に溢れた試みだと言えるだろう。なおコーハン振付の《神話》も、原作である彼のモダンダンス作品《マスク・オブ・セパレーション》から多少簡略化された部分もあるようだが、フロアと同一の作品を氷上で展開しているため、第4類型にも該当すると推測される<sup>[35]</sup>。

今回は紙幅の関係により、敢えて個別作品の評釈や分析は行わないが、こうしてカーリーと舞踊振付家の取り組みを総体的に眺めてみると、コラボレーションはどれも一様ではなく、それぞれ独自の趣向でもって展開されていることがわかるのである。

#### 4. コラボレーションの戦略

さて、すでに明らかにしたように、表1の作品群はいずれも舞踊振付家のアイデアをカーリーが

「翻訳」することで創作されていた。こうした作品の創作過程に鑑みても、彼らの取り組みはまさしく「コラボレーション」と呼ぶに相応しいものであったと評価できるだろう。

しかし一方で、考えてみればカーリーと舞踊振付家の両者にとって、協働作品の創作は極めて厄介な作業であったはずである。なぜならば、舞踊振付家の側からすると、自らのアイデアがいつでも思うように翻訳されるとは限らないからだ。彼ら舞踊振付家にとって、一切馴染みのない氷上での振付が、いかに不自由なことであったかは容易に想像がつく。それはまるで母語ではない未習熟の言語で文章を紡ぐようなものであったに相違ない。また、カーリー自身も振付家として、すでにバレエとのフュージョンを志向したFS作品を幾度となく創作してきたゆえ、わざわざ舞踊振付家のアイデアを翻訳するという回りくどい方法を取らなくても、自らの力で自由自在に振りを考案することもできたであろう<sup>[36]</sup>。だが、それでもなおカーリーと舞踊振付家はコラボレーションを継続したのである。

では、いったい何が彼らを協働へと駆り立てたのか。再び広範な資料を精査し、彼らの言動を総体的に捉えることで、コラボレーションの意図や動機を探っていきたい。

#### 4-1. カーリーの大志

##### ——フィギュアスケートの昇華

まずはカーリー自身の意図を考察していこう。カーリーという人物は決して饒舌ではないのだが、コラボレーションの意図を斟酌するにあまりあるだけの言葉を実は残している。それらの言葉を総合すると、舞踊振付家との協働に臨むカーリーには、「FSの芸術的可能性を引き出す」狙いがあったと考えられる。こうした狙いは、言葉で表明することは簡単でも、いざ実現させようとなると様々な困難を克服せねばならない。

すでに述べたように、カーリーが登場するまで男性のFS競技を席卷していたのは、基本的に「男らしい」スケートであり、踊って表現することよりも、ジャンプなどの跳躍技やコンパルソリーフィギュアの慣習に基づく規律正しいスケートイングを重視するものであった。ゆえに、カーリーが志向する芸術的な——当時は芸術的=女性的・同性愛的と誤って受け取られることもしばしばあった——スケートスタイルに対しては批判が集中することも少なくなかった<sup>[37]</sup>。

実際、アグレッシブな一面も持つカーリーは、こうした批判を受けて、ある大胆な行動に出たことがある。この発端は、1962年の世界チャンピオンであるカナダ代表のドナルド・ジャクソン(Donald George Jackson, 1940-)が、1973年に

カーリーが理想とする優雅で舞踏的なスケートスタイルを暗に批判したことであった<sup>[38]</sup>。この当時、まだ一介の競技者であったカーリーは、こうした批判や侮辱に対して反論する術もなく、ただ沈黙を貫くしかなかった。

しかしその3年後の1976年11月4日、五輪で優勝し一躍スターとなったばかりのカーリーは、BBC Schools TVの番組Sceneに出演<sup>[39]</sup>。なんとそこで彼はジャクソンの演技と自身の演技を比較し、優雅で舞踏的なスケートスタイルを批判する者たちを挑発したのである。TVに出演したカーリーはまず、ジャクソンが世界選手権に優勝した際の演技映像を視聴者に提示する。映像の中のジャクソンはジョルジュ・ビゼー作曲のカルメンに合わせて滑っているのだが、当然、その演技は「男らしく」かつ「規律正しい」スケートスタイルの典型例として視聴者の目に映ることになる。そうしてジャクソンの演技を見せた後、今度はカーリー自らが氷上にて演技を行う。音楽は敢えてジャクソンの演技と全く同じカルメンを使用しているのだが、演技は彼とは全く異なる舞踏的なスケートスタイルを披露し、いかに自らのスタイルが新しく、かつ優れているかを主張した。スケートを始めた当初より、絶えずジェンダーバイアスに晒されてきたカーリーは、マスメディアを通じて、およそ3年もの時を経てついに、自身のスケートスタイルを否定する保守派への報復を行ったのである。

このエピソードが物語るように、カーリーを取り巻く状況は、1976年2月のインスブルック五輪での優勝を契機に劇的に変わる事となる。五輪の金メダル獲得は、すなわちカーリーのスケートスタイルがFS界から正当に評価されたことを意味する。またそれに伴い、メディアから大いに注目されたカーリーは、社会に対する発信力をも手に入れることとなった。だからこそ、その五輪チャンピオンという立場と自身のメディアバリューの双方を活かして、FS業界内に根強く残るジェンダーバイアスに基づいた舞踏的なスケートスタイルへの偏見を打ち破ろうと試みたのだろう。カーリーはこうした過渡期を経てプロに転向し、競技規則に縛られることのない理想のFSを追い求めるべく、アイスショーの分野へと活動の場を移したのである。

ところが、競技の分野で世界の頂点を極め、かつマスメディアで自身のスケートスタイルの正当性を主張したところで、直ちにジェンダーバイアスが解消されるわけでもなければ、FSが舞踏芸術として認められるわけでもない。というのも、実は当時、カーリーの新天地となったアイスショーの世界も、競技の分野と同様に舞踏芸術とは程遠い状態であったのだ。

そもそもアイスショー文化というのは、ハリウッドやニューヨークを中心に展開するショービジネスを企図して1930年代に醸成されたものである。ちなみに、当時は「アイスショー」ではなく、豪華な娯楽舞台を意味する言葉“extravaganza”と“ice”を組み合わせた造語である“icetravaganza”などとも呼称されていた<sup>[40]</sup>。従って、カーリーが登場するまでのアイスショーというのは、どうしても見世物やレビューのような趣になりやすかった。実際、1970年代当時に米国で人気を博していたIce CapadesやIce Folliesといったアイスショーカンパニーの公演は、いずれも娯楽要素の色濃い演出がなされていたようだ<sup>[41]</sup>。カーリーはそうした従来のアイスショーを軽蔑しており、メディアに出演しては頻りに揶揄していた記録が今に残っている。ここにその代表例として、米国のニュース雑誌Timeに掲載されたカーリーのインタビュー記事を引いておこう。

「私はスケーターである」とジョン・カーリーははっきりと言った。「私は、スケーターという言葉にはダンサーという言葉と同等の価値があると信じている」。実際、カーリーはダンスをするアイススケーターであり、アイススケートをするバレエダンサーでもある。[…中略…]

1976年のオリンピックで男子フィギュアスケートの金メダルを獲得した29歳の英国人であるカーリーは、当然、様々なアイスショーから高報酬の仕事を申し込まれた。彼は自らのヴィジョンを追求するために、それら全てを断った。「私は彼ら（既存のアイスショーとその従事者たち）を批判するのは好きではない」と、彼は記者に話した。「しかし、彼らは時代遅れのエンターテインメントであると私は感じている。アイスショーを見に行っても、実はあまりスケートを見ない。私が見ていることといえば、たくさんの見世物、たくさんの見せかけ、たくさんの代用品ばかりで、本物はほとんどない」。<sup>[42]</sup>

このようにカーリーがプロに転向した1970年代のFS界においては、男性が優雅に踊ろうものならジェンダーバイアスに晒され、さらにアイスショーの分野も娯楽志向の興行が席卷していた状況であった。カーリーにとっては、さぞかし堪え難かったことだろう。こうした旧態依然とした状況を打開し、「スケーターがダンサーと同等の存在であること」を業界内外に向けて証明したいと、カーリーが意気込むのも当然のことではないだろうか。しかし、そのためには舞踏芸術に比肩するだけの振付が必要となる。ゆえに、カーリーは自らの

ショーでそれに叶う振付を追求し、FSの芸術性を存分に引き出そうと考えた。

実際には、振付的に価値があり、興味深く、知性と審美的感性に訴えかけることができる何らかの余地が（FSには）大いにある。これこそが、私が擁護しようと試みていることである。私のショーの重点は、振付、音楽性、スタイル、そして演出であり、私の目的は、スケートを興奮だけでなく何か味のあるものとして提示し、スケートの芸術的可能性を引き出し、それを非常に面白い方法で行うことである。<sup>[43]</sup>

かくしてカーリーは、未だ見ぬFSの芸術的可能性を探求するために、舞踊振付家と協働する道を模索した。もちろんそこには、幼少期から恋い焦がれてきたバレエの振付家と共に作品を創作できるという純粋な好奇心もあったことだろう。また一方で、舞踊界の大家たちとコラボレーションを実現させることができた暁には、FSがれっきとした舞踊芸術でもあると認められ得るのではないか、という期待も少なからずあったはずだ。事実、舞踊振付家とのコラボレーションは各種マスメディアから大いに注目されると共に、*Dance Magazine*や*Dancing Times*などの舞踊専門誌でも取り上げられ、高く評価されている<sup>[44]</sup>。

このようにカーリーがプロへと転向した頃の時代背景や彼の言動に鑑みると、FS文化はおよそ舞踊芸術とは言い難い状態にあった。こうした状況を変革し、舞踊芸術としてのFSの可能性を最大限引き出すという志が、彼をコラボレーションへと駆り立てたとみられるのである。

#### 4-2. 舞踊振付家たちの期待

##### ——舞踊振付の拡張

ここまでカーリーの発言からコラボレーションに関する彼自身の戦略を考察してきた。だがそれだけでは、このコラボレーションがあたかも舞踊振付家に対するカーリーの一方的な憧憬や熱意によって生み出されたものと錯覚させてしまう恐れがある。しかし実際には、カーリーいわく、多くの舞踊振付家が協働を持ち掛けるために彼に会いたいと懇願していたようで、舞踊振付家の側も、明確な意図や期待を持ってこのコラボレーションに臨んでいたとみられるのである<sup>[45]</sup>。

では、舞踊振付家たちはカーリーとの協働に何を期待していたのだろうか。同時代批評などで取り上げられた舞踊振付家たちの言葉を網羅的に参照すると、主として2つの意図が浮き彫りとなった。

舞踊振付家たちは第1に、「水上バレエダンサー」としてのカーリーの身体に興味を抱き、協働

を志したと考えられる。従来、男性スケーターの演技とバレエの踊りは似ても似つかないものであったわけだが、カーリーはジェンダーバイアスにも臆することなく、その2つを高度に結びつけた。こうしてバレエのディシプリンを完璧に理解しているだけでなく、それを巧みにスケートの動作に落とし込むことができるカーリーとであれば、バレエという共通言語を介して上手く協働できると舞踊振付家は期待したのである。実際、主に第1類型の作品を創作したマーティンスとボンファーは、コラボレーションの経緯を聞かれて、それぞれ次のように語っている。

なぜならば、ジョンはアイススケートをしているという事実を超えて、素晴らしいダンサーだからだ。<sup>[46]</sup>

ジョンは、これまでに為されなかったこと（スケートとダンスの融合）が氷上で可能になることを証明している。<sup>[47]</sup>

勿論、舞踊振付家たちは単にダンサーの資質を備えたカーリーへの興味関心だけでコラボレーションに臨んだわけではない。舞踊振付家らの第2の意図としては、舞踊振付の拡張が考え得る。ここで注目すべきは彼らが口々に、「グライド (glide)」というキーワードを用いながら「FSのフォーム」<sup>[48]</sup>が持つ可能性について言及している、ということだ<sup>[49]</sup>。グライドとは、様々な語義を持つ言葉であるが、通常動詞として用いられる場合、「滑る」を意味する。まさにスケートを象徴するような言葉なのだが、一方で単に「滑る」と捉えるだけではこの言葉の真意を掴んだことにはならない。

実は、音楽の分野でグライドは、一音一音の音高を区切らず滑らかに繋げて演奏する「グリッサンド (glissando)」奏法を指す言葉となる<sup>[50]</sup>。この滑奏を指すグリッサンドはイタリア語なのだが、語源を辿れば、フランス語で「滑る、滑らかに動く」を意味する「グリセ (glisser)」の現在分詞から派生した言葉であることがわかる<sup>[51]</sup>。そしてグリセは、音楽用語だけでなく、バレエにおいてパとパを滑らかに繋ぐステップを指す「グリッサード (glissade)」というダンス用語にも派生する言葉となる<sup>[52]</sup>。なお、「グリッサンド」(滑奏)と「グリッサード」(滑歩)の共通語源となった「グリセ」の元をさらに辿ってみると、ゲルマン語で「滑る」を意味し、なおかつ「グライド (glide)」の語源ともなる「グリーダン (glidan)」となるようだ<sup>[53]</sup>。

つまり、こうしてグライドにまつわる言葉を辿っていくと、その語源となる言葉は、音楽用語やバレエ用語へも派生していくのだが、それらい

ずれの用語にも「要素と要素の間を滑らかに繋ぐ」というニュアンスがこもっていることがわかるのである。ちなみに、ヒップホップダンスの分野にも、床の上をあたかも滑るようにして動作と動作を繋いでいく「グライド」という名称のステップがある。

改めて考えてみれば、いくら舞踊界広しといえどもFS以上にこのグライドを具現するフォームはないだろう。ゆえにカーリーと協働した舞踊振付家の多くが、このFSというフォームに固有の「動きの滑らかさ」や「滑らかな動きの繋がり」を活かして創作したいと思うことは、当然の成り行きであったかもしれない。中でも、とりわけこの特性に惹かれていたのがサーブである。彼女はカーリーとの協働を次のように振り返っている。

実を言えば、私はまさに最初からこの方向に進んできたのである。(ダンスに) 取り組みはじめた時、私たちは裸足で活動していた。私たちは多回転のビルエットができるようになるためにシューズを履いた。私は非常に速い床(の動作)を常に好んでいた。私はいつも、ある種のファンタジーである「グライド要素」の可能性を欲していた。いま現在、リズムは根本的に体重移動によって規定されている。しかし氷上では、動き続けることができ、かつ体重移動なしでリズムを発現させることができるが、これは素晴らしい利点である。確かに重力がどのように機能するかわからないため、私はこれを解決するつもりではある。しかしながら、スケートを見たり、氷上でリズムを作ろうと試みたことで、リズムのより洗練された定義が得られたと私は感じている。<sup>[54]</sup>

サーブはカーリーと協働する以前から、自身の創作にグライドを取り入れたいと考えていた。そして、いざグライドを強みとしているFSのフォームを扱ってみると、リズムとは何かがよく理解できるようになったと述べている。

その他にも例えば、ルボヴィッチはカーリーとの協働において、男女のスケーターが滑走と回転をひたすら繰り返しながら互いに絡み合う《ティルト・ア・ホワール Tilt-A-Whirl》(1978年)という作品を振り付けている。本作はその名が示すように、それぞれ独自に回転する複数の車が周回軌道上を滑らかに動いていく遊園地のアトラクションに着想を得たもので、このコンセプトから察するにルボヴィッチもFSのグライドをいかに扱うかという点に関心があったと考えられる。事実、彼はこの自身の作品を「切れ目のないリボンの形態(“unbroken ribbons of shape”)」<sup>[55]</sup>と言

い表していたようである。なお、ルボヴィッチはカーリーとの協働を終えた後も、長編FS映像作品である《眠れる森の美女 The Sleeping Beauty》(Anglia TV, 1987)と《ザ・プラネッツ The Planets》(Rhombus Media, 1994)の振付を手掛けており、FSの振付家を自認するまでに至っている。

ここに示したのは一例に過ぎないが、舞踊振付家の言動や協働作品の様態を総体的に参照すると、彼らの多くがFSのフォームとその最大の特性であるグライド要素を創作に取り入れようと試行錯誤していたことが手に取るようにわかる。こうした異なるジャンルの舞踊フォームを自身の創作に活かしたり、コラボレーションを積極的に試みる舞踊振付家の姿勢は、おそらく1960年代に勃興した「ポストモダンダンス」の潮流を汲むものであろう。ポストモダンダンスの概念については、非常に複雑で一概に定義することはできない<sup>[56]</sup>。しかし少なくとも、先行研究によって「コラボレーション」<sup>[57]</sup>や「フォームの借用・並置」<sup>[58]</sup>、「動作の生成・編集」<sup>[59]</sup>などの創作技法がポストモダンダンスに見られる特徴の一つだと分析されている。

このことを踏まえると、カーリーの元に、サーブ、ディーン、フェルド、ルボヴィッチといった前述の創作技法を多用する舞踊振付家が多数集結していることを、単に偶然だと片付けることはできないだろう。実際、サーブやディーンは本論3-2でも説明したように、それぞれ自身に固有のポストモダンダンス的特徴をカーリーとの協働作品にも多分に反映させている。また、フェルドやルボヴィッチも積極的にあらゆるジャンルの舞踊フォームを組み合わせて振付を創作した人物として知られている<sup>[60]</sup>。ルボヴィッチに至っては、1975年前後になると、「単純化された反復的な動きを変化するフォーメーションの中で行う」<sup>[61]</sup>振付を多用するようになるのだが、まさにそうした作風が前述の《ティルト・ア・ホワール》にもはっきりと見て取れる。このような作品の特徴に鑑みれば、彼らによるコラボレーションというのは、バレエはもとより、ポストモダンダンスをめぐる歴史の延長線上にも位置づけることが可能だと考えられるのである。

かくして、カーリーが「バレエのフォーム」<sup>[62]</sup>を応用することでFSを舞踊芸術の域へと昇華させようとしたように、舞踊振付家もまたFSのフォームを取り入れることで自身の振付の可能性を氷上に拡大しようとしたのである。その情熱たるや、カーリーがこのコラボレーションに懸ける想いに負けずとも劣らなかつたはずだ。実際に、カーリーという稀有な身体を通じて、FSという未知なるフォームに触れた舞踊振付家の興奮がいかばかりであったか。それは、次に引くディーンと言

葉を読めば一目瞭然となることだろう。

私は成長するため、アイススケート用に(動きを)調整することが好きである。私はバレエの振付家兼モダンダンスの振付家であるが、いまや私はアイスダンスの振付家でもあるのだ。<sup>[63]</sup>

## 5. 結語

### ——フィギュアスケート史と舞踊史の紐帯

1976年から1984年までのわずか9年の間に、史上類を見ない規模でスケーターと舞踊振付家のコラボレーションが巻き起こった。その運動の中心にいたのは、ジョン・カーリーである。彼はFSとバレエの両ディシプリンを自在に使いこなせるジャンル越境者としての強みを活かしながら、舞踊振付家が考案した振付やアイデアを氷上のスケート動作に翻訳することで、コラボレーション作品を実現させていった。そして結果的に、カーリーは総勢15名の舞踊振付家と、24作もの協働FS作品を創作したのであった。

本論は、これまで曖昧なままとされてきたカーリーと舞踊振付家のコラボレーションの全体像を、緻密な資料調査に基づき明らかにしてきた。具体的には、協働作品のクレジットタイトルを体系的に整理した上で、それら作品の創作過程や内容の傾向を分析した。また、カーリーと舞踊振付家によって語られたコラボレーションに関する言葉の数々についても考察し、彼らは互いにそれぞれ別の目的意識を持って協働に臨んでいたことが浮き彫りとなった。以上を総合すると、とりわけ1976年から1984年の間にカーリーと舞踊振付家の間で行われたコラボレーションは、FS史とクラシックバレエやポストモダンダンスの舞踊史を結びつける画期的な取り組みであったことがわかる。それと同時に、今日から振り返ると、それぞれのジャンルのディシプリンやフォーム、芸術的重点の特性を逆に浮かび上がらせる実験でもあったと再評価できるのである。

[1] Rapp, Linda, "Curry, John (1949-1994)," in Claude J. Summers (Ed.) *The Queer Encyclopedia of Music, Dance, & Musical Theater*, Cleis: California, 2004, p.70.

[2] Vaughan, David, "Perspectives New York: Superskates III," *Dance Magazine*, Vol.51, No.5, May 1977, p.92.

Monahan, James, "John Curry and Company," *The Dancing Times*, Vol.67, No.797, February 1977, p.269.

[3] 本論において用いる「バレエのディシプリン」とは、Warren, Gretchen Ward, *Classical Ballet Technique*, University of South Florida Press:

Florida, 1989において体系的に整理されている、①ポール・ド・ブラヤエポールマン、ポジション・デ・ピエをはじめとするバレエの(アカデミックな)定型的位置と、②動作の最小単位である基本的なパ、の総体を意味する用語として定義する。

[4] Adams, Mary Louise, "To Be an Ordinary Hero: Male Figure Skaters and the Ideology of Gender," *Avante*, Vol.3, No.3, 1997, pp.93-110.

[5] Kisselgoff, Anna, "Dance View: John Curry's Dance on Ice Pioneers Skating as an Art," *The New York Times*, August 12, 1984, Section 2, p.6.

[6] 本論では、フィギュアスケートやアイスダンスではなく、通常のダンスの振付を職業的に行っている専門家を「舞踊振付家」と呼称することとする。

[7] Amdur, Neil, "Figure Skating Growing as a Performing Art," *The New York Times*, November 11, 1976, p.43 & p.54.

Kisselgoff, Anna, "On Ice: Twyla Tharp Twirls a Champion," *The New York Times*, November 17, 1976, Section C, p.24.

Vaughan, *op. cit.*, p.92.

[8] 管見の限り、フィギュアスケート史上初となるコラボレーションは、1936年にノルウェーのスケーターであるソニア・ヘニー (Sonja Henie, 1912-1969) と、アメリカの舞踊振付家であるジャック・ハスケル (Jack Haskell, 1886-1963) の間で行われたものであると考えられる。彼ら/彼女らは、1936年に制作されたハリウッド映画 *One in a Million* の劇中において上演された《スケート・アンサンブル Skating Ensemble》という作品を協働創作した。

[9] 筆者のこれまでの研究によって、カーリー以外にも1930年代から今日に至るまでに、ソニア・ヘニーなどのスタースケーターや、アイスカベードなどのアイスショーカンパニーを中心に、数多くのコラボレーションが試みられてきたことが明らかとなった。だが、そうしたコラボレーションによって創作された多くの作品は、各種公演パンフレットを見ても明らかのように舞踊芸術ではなく見世物やレビューを企図していたと考えられる。

[10] 本論の次節2にて取り上げるカーリーの伝記3冊には、舞踊振付家と協働した事実が記述されているが、論拠となる資料が示されていないことに加え、網羅性は一切なく(むしろ、取り上げられていない舞踊振付家や作品の方が圧倒的に多い)、なおかつ作品の内容に関する記述もほとんど見られない。

[11] 「スパイラル (spiral)」とは、フリーレッグ (氷に接着していない足) を腰より高い位置で維持しながら滑る技法もしくはポジションのことを意味するFS用語。

[12] Adams, *op. cit.*, pp.99-102.

[13] Adams, Mary Louise, *Artistic Impressions: Figure Skating, Masculinity, and the Limits of Sport*, University of Toronto Press: Toronto, 2011, pp.45-80 & pp.161-196.

[14] Jones, Bill, *Alone: The Triumph and Tragedy of John Curry*, Bloomsbury Sport: London, 2014, pp.33-61.

[15] 本論において用いる「フィギュアスケートのディシプリン」とは、①ターン (スリーターン、ブラケット、ロッカー、カウンター、ループ、ツイズル)、②ステップ (チェンジエッジ、クロスロール、チョクトウ、シャッセ・モホーク、トウステップ)、③ジャンプ (アクセル、トゥループ、サルコウ、ループ、フリップ、ルッツ)、④スピン (アップライト、シット、キャメル等) といったFS固有のスケート技術の総体を意味する用語として定義する。

[16] Curry, John & Money, Keith, *John Curry*, Michael Joseph: London, 1978, pp.83-84 & pp.113-115.

[17] *Ibid.*

- Johnson, Robert, "Capezio Offers 1991 Dance Awards," *Dance Magazine*, Vol.65, No.5, May 1991, p.16.
- [18] Oglanby, Elva, *Black Ice: The Life and Death of John Curry*, Victor Gollancz: London, 1995, pp.97-99 & p.109.
- [19] *John Curry Theatre of Skating: Cambridge Theatre* [Souvenir Program], Stilwell Darby & Co. Ltd.: London, 1976.
- [20] *John Curry Theatre of Skating II: London Palladium* [Souvenir Program], Stilwell Darby & Co. Ltd.: London, 1977.
- [21] *John Curry's "IceDancing"* [Souvenir Program], George Fenmore Associates, Inc.: NY, 1979.
- [22] *The John Curry Skating Company: A Symphony on Ice* [Souvenir Program], Scoop Publications LTD.: UK, 1984.
- [23] *The John Curry Skating Company* [Souvenir Program], George Fenmore Associates, Inc.: NY, 1984.
- [24] Oglanby, *op. cit.*, pp.75-294.
- [25] 前掲註 [19] [20] [21] に挙げた公演パンフレットには出演者や関係スタッフのプロフィール欄があるのだが、そこに掲載されている多くのスケーターの略歴において、バレエ経験有りと記述が見られる。
- [26] Thirteen WNET, *John Curry: Dance on Ice* [Skyline Series, No.201], March 6, 1979.
- [27] Egan, Jack, "John Curry: Skating on the Edge of Ballet," *The Washington Post*, July 2, 1978, Section M, p.3.
- [28] *Ibid.*
- [29] 日本語訳は筆者によるものである。( ) 内引用者。以下の引用においても同様。
- [30] 《雪の女王》はテレビで放送する映画作品として制作されたものであるのだが、1982年にその映画が放送された時の番組タイトルは *The Snow Queen: A Skating Ballet* であった。
- [31] *John Curry's "IceDancing"* [Souvenir Program], George Fenmore Associates, Inc.: NY, 1979, p.9.
- [32] 「ツイズル (Twizzle)」とは、細かくターンを繰り返して回転していくFSの技名。
- [33] Bukhari, Kyle, "Twyla Tharp's Classical Impulse," in Kathrina Farrugia-Kriel & Jill Nunes Jensen (Eds.) *The Oxford Handbook of Contemporary Ballet*, Oxford University Press: NY, 2021, pp.45-61. また、Kriegsman, Alan M., "Dance on Thin Ice," *The Washington Post*, January 7, 1979, Section K, p.1 においても、「アフター・オール」と《デュース・クーベ》の創作技法が非常に類似していることが指摘されている。
- [34] Baker, Rob, "Geometries: The Song and Dance of Laura Dean," *Dance Magazine*, Vol.51, No.11, November 1977, pp.40-44.
- [35] ニジンスキー振付《牧神の午後》の諸特徴については、佐藤真知子「《牧神の午後》(1912年)におけるヴァーツラフ・ニジンスキーの創作の意図」(『舞踊学』第41号, 2018年) 1-11頁を参照されたい。
- [36] Kisselgoff, Anna, "Dance: John Curry Skating Troupe at MET Opera," *The New York Times*, July 28, 1984, Section 1, p.15.
- [37] Kisselgoff, Anna, "Robert Cohan's 'Myth' Offered by 'IceDancing,'" *The New York Times*, November 30, 1978, Section C, p.22.
- [38] G.Z. "Face au Sport," *Le Nouvelliste*, 19 Janvier, 1976, p.12.
- [39] Kisselgoff, *op.cit.*, "Robert Cohan's 'Myth' Offered by 'IceDancing,'" p.22において、舞踊批評家のキッセルゴフが、《神話》は1977年のアメリカン・ダンス・フェスティバルでロンドン・コンテンポラリー・ダンス・シアターが初演した《マスク・オブ・セパレーション》を氷上に移したものであることを証言している。
- [40] 筆者の調査によると、1970-80年代にかけてキャリアは少なくとも40作以上のFS作品を自身で振り付けており、その多くがバレエとのフュージョンを企図している。
- [41] Adams, *op. cit.*, *Artistic Impressions: Figure Skating, Masculinity, and the Limits of Sport*, pp.64-75 & pp.181-186.
- [42] Jones, *op. cit.*, pp.83-84.
- [43] British Broadcasting Corporation Schools TV, *Personal View: John Curry*, OBE [Scene Series, No.115], November 4, 1976.
- [44] 例えば、フィラデルフィアバレエ団の創設者であるキャサリン・リトルフィールド (Catherine Littlefield, 1905-1951) と、ノルウェーのスケーターであるソニア・ヘニーが協働して制作したアメリカ初のアイスシアター *It Happens on Ice* (1940年) は、"Iceextravaganza" と銘打たれていた。 *It Happens on Ice* [program], The New York Theatre Program Corporation: NY, 1940を参照のこと。
- [45] 1940年代から1970年代までに実施されたアイススケートおよびアイスフォリーズの公演パンフレットを参照のこと。
- [46] Clarke, Gerald, "Ballet Dancing on the Ice: Olympic Champ John Curry Turns Old Sport into New Art," *Time*, Vol.112, No.23, December 4, 1978, p.92.
- [47] Gruen, John, "Can Ballet be Danced on Skates?," *The New York Times*, November 19, 1978, Section 2, p.18.
- [48] Monahan, *op. cit.*, pp.268-269.
- [49] Jackson, George, "The Refined Flavor of Curry on Ice," *Dance Magazine*, Vol.59, No.11, November 1985, p.24.
- [50] Eagan, *op. cit.*, p.3.
- [51] "Ballet and 'Summer Evening on Ice,'" *The New York Times*, June 6, 1978, Section C, p.2.
- [52] Clarke, *op. cit.*, p.92.
- [53] 本論において「FSのフォーム」とは、FSのディシプリンによって為される一定の表現方式のことを意味するものとして定義する。
- [54] Tobias, Tobi, "The Rink: Gold Medalist John Curry and His Skating Company Looked Best When the Choreography was Least Balletic, Most Innovative," *New York Magazine*, Vol.17, No.32, August 13, 1984, p.48.
- [55] *Collins Dictionary*で"glide"の項を引くと、「音楽の分野においては"portamento"を実行すること」と記載されているが、この"portamento"は"glissando"と同一視される概念である。
- [56] *Trésor de la Langue Française*の"glissando"項を参照のこと。
- [57] *Le Nouveau Petit Robert de la Langue Française*の"glissade"項を参照のこと。
- [58] *Le Nouveau Petit Robert de la Langue Française*の"glisser"項、および *Oxford English Dictionary*の"glide"項を参照のこと。
- [59] Smith, Amanda, "John Curry Meets Twyla Tharp," *WomenSports*, Vol.4, No.3, 1997, p.22.
- [60] Dunning, Jennifer, "Dance: Lar Lubovitch," *The New York Times*, April 4, 1981, p.12.
- [61] Shusterman, Richard, "Aesthetics and Postmodernism," in Jerrold Levinson (Ed.) *The Oxford Handbook of Aesthetics -Paperback Edition-*, Oxford University Press: NY, 2005, pp.771-782.
- [62] Foster, Susan Leigh, *Choreography Empathy:*

*Kinesthesia in Performance*, Routledge: Oxon, 2011, pp.60-72.

- [58] Banes, Sally, *Terpsichore in Sneakers: Post-Modern Dance -Paperback Edition-*, Wesleyan University Press: Connecticut, 1987, pp.xiii-xxxix.
- [59] 尼ヶ崎彬「生成モデルと編集モデル——振付けない振付家たち」(『ダンス・クリティーク——舞踊の現代／舞踊の身体』勁草書房, 2004年) 73-85頁。
- [60] フェルドの作風については, Reynolds, Nancy & McCormik, Malcolm, *No Fixed Points: Dance in the Twentieth Century*, Yale University Press: New Haven, 2003, pp.472-476を参照されたい。また, ルボヴィッチは2022年6月20日にApple Podcastが放送した*Movers & Shapers: A Dance Podcast*というインタビュー番組に出演し, 「自分はポストモダンではなく, プレポストモダンの舞踊振付家で, 例えばロックンロールをバレエやモダンダンスに移行させるなど, 舞踊言語を自由な流れの中で組み合わせることを行い, ポストモダンダンスへと通ずる扉を開いた」と言及している。
- [61] Reynolds, *op.cit.*, p.476.
- [62] 本論において「バレエのフォーム」とは, バレエのディシプリンに基づいて為される一定の表現方式のことを意味するものとして定義する。
- [63] Simmons, Nicole, "Choreography That Turns Skating into Dancing," *The New York Times*, July 27, 1984, Section C, p.3.

#### 【追記】

本論文は, 2021~2022年度科研費(若手研究, 21K12872)「ダンスとスポーツの領域横断的研究: 芸術的スポーツの史的記述と批評理論の構築」による研究成果の一部である。